

保健室登校の理解, 保護者との関わり

1 保健室登校の意義

不登校の回復期にある子どもが、保健室のような教室以外の場所に心の居場所を求めて登校することがあります。

子どもの気持ち

教室には入りにくいですが、せめて教室以外のどこかに登校したい
みんなに見られないような場所なら登校できそうだ

条件

子どもや保護者の心の支えになる人がいる
自分のことを分かってもらえる人がいる
自分が困った時に、助けてもらえそうな人がいる

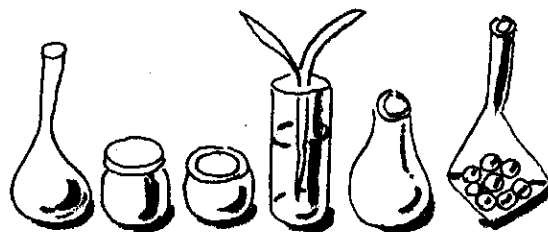
教室以外の場所は主に保健室となりますが、学校によっては校長室、職員室、相談室、準備室、図書室のような場所であったりします。いずれの場所も、他の子どもの目に触れにくい所です。

上記のような条件を満たした場所で、子どもは不安や緊張感の軽減を図っています。教室以外の場所への登校は、そこでの体験や学習をステップとして、教室への復帰を可能にしていきます。

2 養護教諭の役割

- ・ 養護教諭は心身の健康の保持増進に関する専門的知識を持っているので、心と体の両面への対応ができる。
- ・ 養護教諭は、不登校などの心の健康に関する問題に対応することができる。
- ・ 学習指導及び評価をしている学級担任などに比べて、養護教諭は子どもに与える心理的負担が少ない。
- ・ 子どもは、養護教諭は心配や不安を受け止めてくれる人だと感じている。
- ・ 心の悩みや葛藤が、身体的な症状として表れることがしばしばあるが、養護教諭はこうしたサインにいち早く気づき、対応することができる。

養護教諭は、学習の場としての教室とは別の性格を持った特別な空間、即ち保健室にいます。だからこそ、不登校の子どもが安心して、或いは、不安定な気持ちを受け入れてもらえると思ってやってくるのです。

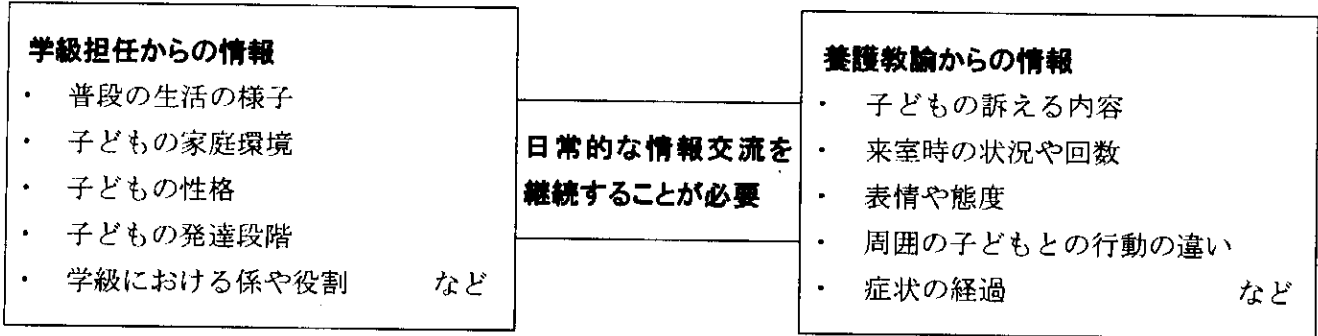


3 養護教諭と学級担任との連携

学級担任は、養護教諭のみに指導を任せてはいけません。立場の異なる両者が協力をして、指導を進めていきます。養護教諭の専門性を生かし、学級担任との連携・協力を図っていきましょう。

連携により養護教諭の専門性を生かそう

- ① 身体的な症状などから問題傾向の早期発見をする。
- ② 身体に表れる問題の心因的な要因を吟味する。
- ③ 教育相談主任や学級担任への連絡や助言をする。
- ④ 子どもの心身の健康問題に対する面接相談をする。
- ⑤ 外部専門機関との連絡をとる。



4 校内の連携を組織的に行う

<p>全職員が協力して、気がかりな子どもに対して、共通理解の下に対応できる指導体制をつくっていきます。</p>	<p>具体的共通理解</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員会議 ・ 生徒指導委員会 ・ 教育相談委員会 ・ 学年会 <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもへの接し方 ・ 言葉のかけ方 ・ 友達との関わらせ方 ・ 学級の様子の伝え方 ・ 時間割や行事の連絡
---	-----------------------	---

5 保健室登校の基本的な考え方

保健室登校により学級復帰したケースが多くあります。保健室は、教室という場で適応できなくなった子どもが、自分の心の傷や身体的な苦痛を癒し、本来持っている力を取り戻す所になります。同時に、再登校や教室復帰への足場となります。

保健室登校には、次のようなものがあります。

<p>全く教室には行けないので、常に保健室に登校する場合</p>	<p>不登校の状態から抜け出し、教室に行くためのステップとして、保健室に登校しています。</p>
<p>特定の教科の時間、或いは特定の曜日だけ出席することができるが、主として保健室で過ごす場合</p>	<p>教室での生活の継続が難しい状態です。ある一定の時間を保健室で過ごすことにより、心の居場所を見付けて、安心して教室に戻っていきます。</p>

養護教諭の対応は、来室した子どもの身体的苦痛やその背景の悩みを積極的に聞いたり、不安な気持ちを受け止めたりする精神的な健康相談活動が中心となります。それは、予防的指導であったり、アフターケアとしての指導であったりします。

6 保健室登校についての留意点

1	一定の時間、安心していられるように配慮する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校の行事や時間割から見て、比較的人の出入りが少ない時間帯に利用できるようにする。 ・ 子どもの気持ちを考え、時間を度々変更することは避ける。ほぼ同じ時間帯に使えるようにする。 ・ 継続的に利用できるようにする。
2	心の居場所になることを第一とする	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導の当初は、子どもの気持ちを受け止め、心を癒す場になるようにする。 ・ 教室への復帰を試みる段階では、不安と緊張が伴うので、安全な場所としていつでも避難して来られるようにしておく。
3	好ましい対人関係の形成を図り、その範囲を徐々に広げていく	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達や担任以外の教師など、好ましい人間関係の結べる人を増やしていく場所としても利用する。 ・ 当初は学級担任や養護教諭、教育相談主任、相談員などが接し、慣れるに従い、接触する人の範囲を広げていく。最初から、入れ替わり立ち代わり色々な人が出入りすることは、緊張を高めることになるので好ましくない。
4	保健室が最終目標にならないように配慮する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教室へ復帰する一つのステップになるようにする。このことは、子ども、保護者、関係職員が十分に共通理解する必要がある。 ・ 子どもの心情を無視して強引な指導をすることは好ましくないが、関係者が共通理解を図りながら、見通しを持って指導に当たる。
5	保健室を拠点にして、学校内で動ける範囲を徐々に広げていくようにする	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの心理的状態や意志を確かめながら、徐々に体育館、校庭、職員室、図書室、特別教室などと、色々な場所への順応を図っていく。
6	場所への順応から、集団活動への適応を図っていく	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保健室をベース基地にしながらも、学校行事やその他の集団活動など体を動かして行う楽しい活動に徐々に参加できるようにする。 ・ 参加してみて不安や緊張が強ければ、それを癒すために子どものベース基地にいつでも戻れるように配慮する。
7	居心地のよい物理的、物的環境を整える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 専用の机やいすを用意する。 ・ 過ごしやすい物理的条件を整える。比較的静かな所、風通し、室温、採光など。 ・ 花瓶を置いたり、花を生けたり、額絵などを飾る。 ・ 校内放送が聞けるようにする。

7 保健室登校の保護者との関わりを深めるために

子どもが登校を渋ることは、保護者にとり、想像もできないぐらいショックな出来事です。我が子に裏切られたように思い、子どもを非難する気持ちで一杯になったりします。保護者自身が自分の有り様を見つめる余裕はありません。

このような保護者の気持ちを受け止めることから、保護者と親と学校との信頼関係づくりがスタートします。

(1) 子どもの要求を先取りしてしまう母親との関係を深める

A君は言葉数が少なく、単語で会話することが多い子です。話をするとき、言葉足らずのため説明ができないでいると、母親が本人の代わりに話をしてしまいます。そのため、本人の出番が少なくなってしまう。

話をするのが苦手なため、母親のそばを離れようとしなくなりました。教師が話し掛けても、母親が喋るのを待っているという状況になりました。本人は返事をするだけで、話し掛けようとはしません。朝、他の子どもと一緒に登校することが難しいので、本人と母親の二人で登校するようになりました。

① 母親の言葉を受容的に聞く(悪者探しをしない)

○ 母親の話の概要

- ・ この頃、朝起きてくると、置いてある洋服を自分で着るようになりました。
- ・ 幼稚園はスモックを着ればよかったのですが、入学してからは、何を着ていくのか決められません。服を着せるのも、大変でした。

○ 母親と一緒に考えた結果、明らかになったこと

- ・ 幼稚園から今までの子どもの生活の様子を話題にしました。
- ・ 受容的に聞いたことで、母親が今まで子どものことを優先して、子どものために色々なことをしてきたことが分かりました。

② 母親自身の気付き

○ 母親の話の概要

- ・ その持ち物が、何をするために必要なのが分かりませんでした。理由を、先生に聞くこともできませんでした。
- ・ 水泳の授業を嫌がりました。嫌がるので、見学をしました。次第に、体育を嫌がるようになりました。
- ・ 学校へ行くという条件で、生き物を飼ったり、ゲームソフトを買ったりしました。

○ 母親と一緒に考えた結果、明らかになったこと

- ・ 母親はあまり困った様子もなく話をします。登校を交換条件にすることが望ましいことなのか、一緒に考えました。
- ・ とにかく登校して欲しい。登校できなくなったら困ると考えていました。
- ・ 不登校について、本当は子どもが困るのではなく、母親が困ることに気付きました。

③ 家族の問題が明らかになる(夫婦の葛藤)

○ 母親の話の概要

- ・ 子どもの様子を父親に話そうとしても、仕事があるからといって相談できません。先生から父親に話をしてもらえないでしょうか。

- ・ 父親は仕事で遠くに出かけることが多く、休日も一人で出かけてしまいます。

○ 母親と一緒に考えた結果、明らかになったこと

- ・ 母親が子育ての悩みを一人で抱えていることが分かりました。
- ・ 両親での面接を早急に実施しましょう。父親の思い、母親の願い、学校の方針などを話し合い、どのように子どもを支援するか考えていきましょう。

④ 母親が自分のことを話すようになる(洞察)

○ 母親の話の概要

- ・ 母親は小さい時に両親に死別しました。そのため、姉が母親代わりに育ててくれました。
- ・ 相談するのはいつも姉だけで、近所に相談をする人もいません。子どもと二人で、テレビかビデオを見て過ごしていました。

○ 母親と一緒に考えた結果、明らかになったこと

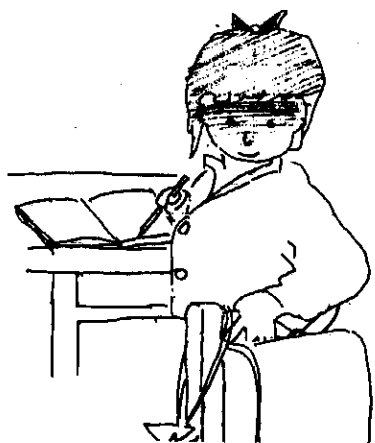
- ・ 母親自身が自分の母親に育てられていないため、子育てで困った時は、姉や育児書を頼りにしていたことが分かりました。
- ・ 育児書の通りにならないと、母親は不安になります。
- ・ つい母親が手伝ってしまうことが多くなります。子どもも自分ではできないので、母親から離れられないという関係になっているようでした。

保健室登校したときは、母親と話をする時間を少しずつ作りました。母親は、朝の登校時の様子やこれまでの生活のことについて話をしました。登校が続くようになると、母親は自分の子育てのこと、子どもへの接し方などについて話すようになりました。

子どもが不登校になった理由を探すのではなく、子どもの気持ちを分かろうとする姿勢を大切にしました。母親とより良い関係づくりのために、悪者探しをしないように気をつけながら、母親の話をゆっくり聞くようにします。子どもの話題だけでなく、テレビ番組や趣味の話題など、できるだけ母親が話やすいように心がけます。また、専門機関の紹介などについても、無理のない範囲で話題にします。

母親との面接が継続すると、母親は

- ・ 自分が子どもの要求を先取りしているので、控えるようにしたい
 - ・ 子育てが母親任せになっているので、父親の援助を求めて、二人で子育てをしたい
 - ・ 姉や育児書に頼りすぎず、自分なりに子どもに必要なことを考えて行動したい
- ことに気付くようになりました。



(2) 環境に不慣れなために対人緊張が高い母親との関わり

B君は、風邪のため3日間学校を休みました。通院の途中で偶然、同じ学年の子どもに出会い、医者から帰ってくるなり部屋に閉じこもってしまいました。次の日から、朝になると、「気持ちが悪い」「おなかが痛い」と訴え、登校できなくなりました。

母親からの連絡を受け、相談をしました。母親はかなり悩んでいます。家での様子を聞いても、「子どもが部屋に閉じこもっているのだから分からない」と言います。小さい頃のことを聞いても、「変わったことは何もありません」など、母親からは本人の様子が伝わってきません。

B君の不登校が続いているためか、弟も登校を渋るようになりました。担任の要請があり、母親との教育相談をしました。母親は、自分からは何も話そうとはしません。こちらから尋ねても、返事は曖昧なものでした。そこで、保健室登校を提案しました。B君は登校できませんでしたが、弟が母親と一緒に登校するようになり、時間を決めて教育相談を行うこともできました。母親とは雑談をしたり、B君の様子について聞いたり、転校前の学校について尋ねたりしました。

① 母親との関わりを持つ(受容)

○ 母親の話の概要

- ・ 子どもに学校の様子を尋ねても、分からないとか知らないというだけで、何も話してくれません。
- ・ 登校を嫌がることは初めてで、どうしたらいいのかわかりません。
- ・ 前の学校は宿題がなく、自由勉強だけでした。授業中も、発表するよりは先生の話聞くことが中心でした。

○ 母親と一緒に考えた結果、明らかになったこと

- ・ 母親と向き合って話をしようとしても話をしません。
- ・ 保健室登校をしている親子の様子も、母親から子どもへの言葉かけはほとんどありません。
- ・ 母親と子どもの会話の中に、分からないという言葉がよく出ました。母親は子育てに自信をなくしています。

② 学校への適応を図る(信頼関係づくり)

○ 母親の話の概要

- ・ 子どもに、どのような言葉をかけたらいいいですか？
- ・ どんな会話をしたらいいですか？
- ・ 子どもがこんなことを言いますが、どう答えたらいいですか？
- ・ 主人にはどう話したらいいですか？

○ 母親と一緒に考えた結果、明らかになったこと

- ・ 前の学校と今の学校の様子の違いに気づき、母親が、今の生活に慣れることが第一と考えるようになりました。
- ・ 学校の様子や学習の方法などが、話題にのぼるようになりました。
- ・ 弟が保健室登校できるようになると、母親が子どもの様子について話をするようになりました。
- ・ 保健室登校のとき、毎日少しずつ話す時間を作り、話題を広げられるようになりました。

③ 自分自身の問題が明らかになる(自己受容)

○ 母親の話の概要

- ・ 私は子どもの頃、話をしない子でした。学校で一日中喋らないこともありました。家で弟を相手に遊んでいました。
- ・ 子どもを育てるときも、他の人と関わりをほとんど持つことができませんでした。

○ 母親と一緒に考えた結果、明らかになったこと

- ・ 母親は子育てに自信がなくなり、今までの子育てを否定するようになりました。
- ・ 家族の中でも相談できないようでした。母親自身が、対人緊張が強いために、人との関わりを持つことを苦手とっていました。

家族の中で、母親だけが苦しんでいるような様子が見られたので、両親との面接をしました。

- (父親から)・ 子どもをゆっくりと見守りたい。
- ・ 学校との協力体制をとり、今後も学校の支援をお願いしたい。
- (学校から)・ 保健室登校も一つの登校のスタイルである。
- ・ 専門機関の紹介。

面接後、母親と一緒に次のようなことに取り組みました。

- ・ 母親が保健室登校に慣れるように、保健室登校をしている他の母親と一緒に雑談をする。
- ・ 専門機関に相談に行く前に、計画を一緒に立てる。
- ・ 家に閉じこもっているB君が、少しでも外との関わりが持てるようにする。例えば、子どもが参加できる行事を新聞や広報などから探して、参加を勧める。

母親の願いや思いを少しでも汲み取り、協力するようになりました。すると、母親が緊張しなくなり、気軽に学校へ電話をかけたり、相談できるようになりました。

8 保護者との関わりの中で

面接を継続すると、保健室登校をしている子どもの家庭状況などが分かってきます。過保護、放任など、養育の間違いに気付いたときには、親に指摘したくなる場合があります。しかし、親の問題性を面接中に指摘してよいということにはなりません。自分の欠点を指摘された親は、非難されているように感じてしまいます。この先生は自分を分かろうとしない人だと、逆に親から指摘され、面接が続かなくなります。面接では、親の気持ちを受容し、親の立場に立って、一緒に考えることが大切なことです。

保護者との関わりで大切にしたいこと

保健室登校をしている親の気持ちを受容し、親の立場に立ち、親と一緒に不登校の意味を考え、最終的には、親自らが解決できるように援助する

体調が悪い時に手当てを受けたり、休養したり、健康診断を受けたりするのが保健室。これが、保健室に対する子どものイメージです。いってみれば、病院などの医療機関のイメージがあります。また、教室や職員室など、授業や教育活動の行われる場所とは全く違う、自由で保護的なイメージもあります。保護者も、子どもが具合のよくない時にお世話になる場所、子どもの健康について医療的見地からの指導や助言をしてもらえる場所というイメージを抱いています。

ですから、不登校の子どもや保護者と接する時、保健室に対する良いイメージを有効に活用し、保護者が自ら解決できるよう援助をしていきましょう。

(参考文献)「S amte 健康教育ビジュアル実践講座 第4巻 心の健康とヘルスカウセリング」

1996 健康教育ビジュアル実践講座刊行会編集 ニチブン

「実践学校保健選書・18」 学校における精神衛生12章 山口大学 光岡征夫 著

「心の健康問題の理解と対応」 日本学校保健会

「登校拒否問題への取組について」 平成9年3月 文部省